

国語科を中心とする授業力向上についての一考察

A Study on the Development of Teacher Competence,
Centering on Teaching Japanese Language Arts

吉田 人史 水上 義行
YOSHIDA Hitoshi MIZUKAMI Yoshiyuki

はじめに

授業とは、子どもたちの発達段階に応じた教科等の指導を通して、知識や技能を習得させ、思考力や判断力、表現力等を育成する教育的な営みである。

授業を行う教師には、本時のねらいを達成しようとして取り組む「熱意」、子ども一人一人の実態を考慮して学習を進めようとする「誠意」、学習活動を楽しくわかりやすいものにしようとする「創意」が必要である。

国語科の授業を例に述べれば、次のとおりである。

- ・この一時間の授業中に国語辞典の引き方をなんとかしてでもわかるようにしたい→熱意
- ・作文の得意や不得意を超えて全員が原稿用紙に書くことができるようにしたい→誠意
- ・登場人物の気持ちを想像するために動作化等も取り入れて楽しい学習にしたい→創意

一方、「授業づくり」という言葉があるように、授業は一つの構成物としても捉えられる。

教師の授業力向上の研究は、主に「構成物としての授業を分析する方法」で行われてきた。

そこでは、実際に行われた本時の授業を振り返り、学習問題成立の過程、発問や助言の吟味、板書の効果、話し合いの進め方、グループ学習取り入れの意義等、授業を構成する様々な要素を取り上げて、教師の働きかけや子どもたちの学びが語られ、種々の解釈が交わされる。

しかし、授業というものは極めて複雑多岐にわたる営みであり、その構成要素の全てを取り上げて分析し尽くすことは不可能に近い。そして、何よりも主人公である子どもたち自身は、授業を分析的に捉えてはいない。

そこで、本稿では、授業を様々な構成要素に分解して考えるのではなく、「授業というものをまるごと受け止める」という方法で、教師の授業力向上を図る可能性を探りたい。

論の進め方は、まず「自分が今もっている『授業観』を見つめ直す」、次に「今の『授業観』がどのようにして形成されてきたか、その跡を振り返る」という順序で行うことにする。

1 今、自分の内にある授業観を見つめ直す

授業力向上は、目標とする授業像について、自分なりの言葉で表現することから始まる。

「理想の授業像」について、新採用教員から中堅教員までの経験年数も様々な小中学校教諭(約40人)を対象に、「一言アンケート」を取ったことがある。

以下は、その回答のいくつかである。

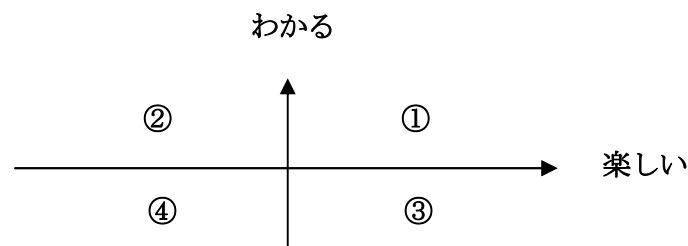
- ・わかる喜びがある授業
- ・知的な楽しさのある授業
- ・わかることがうれしくなる授業
- ・子どもの目が輝く授業
- ・学ぶ楽しさを味わえる授業
- ・次の時間が待ち遠しくなる授業
- ・わかる喜びを知り、意欲的に取り組む授業 等々

多種多様な表現があったが、中でも多かったのは、「わかる授業」という意味内容の言葉と、「楽しい授業」という意味を示す言葉である。

「よくわかる授業論」⁽¹⁾には、次のように述べられている。

～よい授業の条件として、「わかる授業」や「たのしい授業」ということばがよく使われます。そして、この「わかる」と「たのしい」は調和することで、よい授業が生み出されると一般には理解されています。(以下略)～

これらのことから、「わかる」という言葉と「楽しい」という言葉を軸にして、小中学校教師が目指す「授業像」を位置付けると次のようになる。

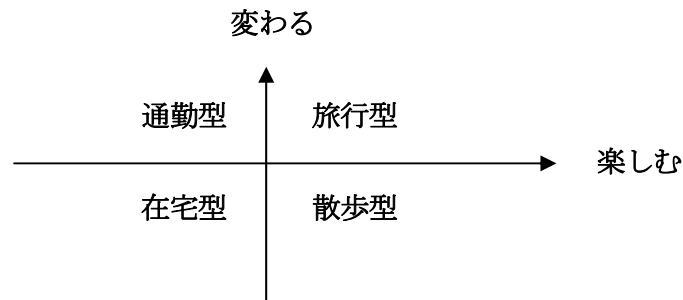


誰もが理想とするのは、当然①の「楽しくてよくわかる授業」「よくわかって楽しい授業」であり、④は避けたい。

しかし、ここで意見が分かれるのは、二番目に望ましいとする授業である。②は「楽しさよりもわかることを重視する授業」であり、③は「わかることよりも楽しさを最優先させる授業」である。望ましい授業の順番を、①→②→③→④と考える教師と、①→③→②→④と考える教師とは、授業というものに対する考え方がかなり異なっているのではないだろうか。

このことについて、「子どもは授業で鍛える」⁽²⁾では、次のような「授業の四タイプ」を挙げて述べている。

同著の図では、「わかる」が「変わる」になり、「楽しい」が「楽しむ」になっているが、表そうとしているものは同じである。



この図で望ましいのは、目的があり計画もしっかりしている「旅行型」授業であり、意欲の感じられない「在宅型」授業は避けたい。

考えが分かれるのは、「旅行型」の次にどの型を位置付けるか、ということについてである。

わき目も振らずとにかく決められた目的地到着を目指す「通勤型」授業なのか、それとも、目的地到着が多少遅れても途中の寄り道散策等により多くの時間を割く「散歩型」授業なのか、自分が望ましいと思うのはどの型かにより、その授業で育つ「学力」にも違いが出てくる。

このように、「わかる」という言葉と「楽しい」という言葉を二つの軸にして、自分の内に今ある「理想の授業像」を互いに語り合うことで、自分の授業観を見直すことができる。それは、「授業とは何か」という問いに正対し、授業力向上を目指す道程の大きな一歩になる。

2 自分の授業観形成の跡を振り返る

目指す授業像を自分の言葉で表現することができたら、次には、それがどのようにして形成されてきたか振り返ることで、自分の教育観の根本を見つめ、授業力向上の歩みを地に就いたものにすることができる。

本稿では、この項でも分析的な授業把握ではなく、メタファーでの授業把握、言い換えれば「授業という営みを何かに見立てる」ことで論を進める。

「成長する教師」(3)には、「授業をイメージする」という論題で次のことが述べられている。
 ～授業のイメージは、教える経験、教師としての成長によって、どのように変わっていくのだろうか。また授業へのイメージに着目することは、教師の成長や授業研究を考える上でどのような意味をもっているのだろうか。(以下略)～

そこには、一例として、40代のある小学校教師が、「授業は相撲だ」という比喻で、授業の場を「土俵」、教師は「力士」、子どもは「相手力士」、授業を「相撲勝負」に譬えて自分の授業を振り返っていることが記述されている。また、教員養成大学で「授業とは～のようだ」という題で学生が書いた文章を分析した論考等も掲載されている。

私自身は、自分の授業イメージの変遷を、「追究を楽しむ授業」(4)で次のように述べた。

その1 授業はドラマに似ている

授業では、教師という作家兼演出家が、指導案というシナリオを書き、子どもたちという出演者が、教室という舞台の上で演技をする。構成が考えられていて山場

もある。うまい授業を見るといいドラマを見た時と同じように感動することもある。

自分は、授業づくりをドラマづくりのように思っている時期があった。

その2 授業は調理に似ている

学習意欲について悩んでいる時、授業は調理とも似ているような気がしてきた。子どもたちに食欲がない、つまり学習意欲がない場合もなんとかして食べたくなるように調理法の工夫、即ち教材研究や指導法の工夫をして、栄養価のある食べ物である教材が、子どもたちの血や肉になるようにしたい。

その3 授業は芋掘りに似ている

どの芋づるをひっぱれば、より大きな芋が土の中から出てくるか。それは芋掘りの楽しみである。例えば、国語科の読解学習で、文章中のどの叙述や友達のどのような発言に着目すれば、より深い読みに至ることができるのか、まるで芋のつるをひくような楽しみが、授業にはあるのではないか。

その4 授業イメージは深まってきている

はじめ「授業がドラマに見えた」のは、演出家や脚本家を意識した、いわば「教師の側からの授業イメージ」である。次に「授業が調理に似ている」と思ったのは、「教材の側からの授業イメージ」であると言える。そして「授業は芋掘りみたいだ」というのは、芋づるをひく「子どもの側からの授業イメージ」である。

自分の授業に対するイメージは、教師中心から教材中心、更には子ども中心へと変化しながら深まってきたのだ。

その5 授業は生き物である

自分の授業イメージの変化には秘かな自信をもってしたが、ある授業事後研究会での先輩の言葉、「まさに、授業は生き物だな」という一言にショックを受けた。

何かのものごとを極めた達人たちには、その何かが命をもっているように見える瞬間がある、と聞いたことがある。それを思い出し、授業というものがまるで生き物のように見える境地があることに気づいた。

そして、論の最後に次のように記した。

～論語に「之を知る者はこれを好む者に如かず。之を好む者は之を楽しむ者に如かず」という言葉がある。この中の「之」を「授業」に置き換えて読むと次のようになる。

・授業を知る者は授業を好む者に敵わない。授業を好む者は授業を楽しむ者に敵わない。

自分はまだ「授業を楽しむ」境地には程遠いところにいるらしい。まさに、「授業道」の修行にはきりが無い。～

「授業道」を求め続けていると、ふと心に留めた日常の何気ない出来事等で、自分の授業観や教育観が影響を受ける場合がある。それは、「授業とは何か」「教育とは何か」という問いを、まるごとかかえていることから起きる変化なのかも知れない。

そのような変化をきっかけにして、自分の授業観形成の跡を振り返る時間は、授業力向上への大きな弾みになることは確かである。

おわりに

子どもたちにとっての「授業の魅力」とは何だろうか。その手掛かりを「授業の名言」(5)に求めたい。そこには、実践家や研究者の「授業についての名言」が、数多く集められている。そして、第1章から第4章までには、次のような章見出しがつけられている。

- ・第1章 何を教えるか
- ・第2章 どう教えるか
- ・第3章 どんな人間関係で
- ・第4章 どんな教師が

これは、いわば教師側からの「授業づくりの視点」である。同時に、子どもの側から見ると、「授業の魅力」がどこにあるかを端的に示す観点でもある。

私は、子どもたちが感じる「授業の魅力」は、次の四つにあると考える。

- ① 何を教えるか＝学習内容・・・「何を学ぶか」に魅力がある。
- ② どう教えるか＝学習方法・・・「どう学ぶか」に魅力がある。
- ③ どんな人間関係で＝学習集団・・・「誰と学ぶか」に魅力がある。
- ④ どんな教師が＝学習指導者・・・「誰に学ぶか」に魅力がある。

国語科の授業で言えば、「新しい文章に出会う時」(学習内容)はわくわくするし、「新出漢字を覚える時もその成り立ちを考えながら学習する」(学習方法)のはおもしろそうである。また、「気持ちを込めてグループの友達と役割音読する」(学習集団)ことは楽しいし、「戦争文学の時代背景をその時代の経験者から学ぶ」(学習指導者)ことはたいへん興味深い。

授業という営みをまるごと捉えて授業力の向上を目指す時、言い換えれば「授業道の奥義」に迫ろうと願う時、私たちにできるのは、学習内容、学習方法、学習集団、学習指導者、この四つの魅力を高め続けることではないだろうか。

注

- 1 田中耕治編 『よくわかる授業論』ミネルヴァ書房 2009
8頁(『わかる授業』と『たのしい授業』田中耕治)
- 2 野口芳宏著 『鍛える国語教室シリーズ12 子どもは授業で鍛える』明治図書 2007
232頁～236頁
- 3 浅田匡、生田孝至、藤岡完治編著 『成長する教師 教師学への誘い』金子書房 2000
74頁～88頁(第5章「授業をイメージする」秋田喜代美)
- 4 富山大学教育学部附属小学校著 『追究を楽しむ授業』協同出版 1994
132頁～133頁(『授業道』の奥義を求めて)吉田人史)
- 5 片岡徳雄編著 『授業の名言』黎明書房 1992 4頁～9頁